

国土審議会計画推進部会 住み続けられる国土専門委員会（第7回）

1. 日 時：平成29年12月4日（月）14:00～16:00

2. 場 所：中央合同庁舎第2号館 11階 国土政策局会議室

3. 出席者：

（住み続けられる国土専門委員会 委員 1名欠席）

小田切委員長、高橋委員、玉沖委員、沼尾委員、広井委員、藤山委員、松永委員、若菜委員

（国土政策局）

野村局長、北村審議官、滝澤総務課長、木村総合計画課長 他

（オブザーバー）

内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局 参事官

総務省自治行政局 地域自立応援課長

農林水産省農村振興局 農村政策部農村計画課 農村政策推進室長

4. 内 容

（水谷補佐）＜資料説明＞

（高柳企画専門官）＜事務局資料説明＞

（西粟倉村 上山参事）＜資料説明＞

- ・ 村の面積の95%が森林、農地は120ヘクタールほど。杉、ヒノキの人工林が85%ということで、昭和30年代に植えた杉、ヒノキがほぼ50年生、60年生になり、本来なら主伐期に入り、村民の方に収入が入るということだったが、ご存知のように現状は木材価格が非常に低迷、所有者の方の意識もなくなってきたということで、この取り組みを起点に森林整備を始めた。
- ・ 人口と世帯数の関係について、緩やかに減少を続けているが、2010年ぐらいにかけては、やや減少の率が横ばいに推移しつつある。一方、どこの地域も恐らくそうだと思うが、世帯数は増加の傾向。これは、ベンチャーの方とかいろいろな方が、1人來られても世帯数は1になるので、世帯数自体はかなり伸び、今は住宅不足を起こしているというような状態。
- ・ 園児も、児童・生徒数もそれにあわせて、回復の傾向にあり、今、一旦126まで下

がったが、最終で158になると思うが、回復をし始めている。

- ・ 人口1,490人に占めるIターンの人数が、130人になっており、約9%がIターンの方という状況。ベンチャーで起業されて来られている方も結構いて、そのベンチャーの中で働いている方も結構いる。この中には、地域おこし協力隊員の方もかなりいて、そのまま移住・定住で残っている方が、大体85%強ぐらいいる。
- ・ 実は、平成の合併はせずに単独の村として残ったという経緯がある。そのときに、どういうふうに地域を活性化していくか。もしくは、地域として光っていくかという議論を続け、結論としては、「心産業」といって、生產品と地域の人のストーリーをつなぎ合わせたもので、都市部の方とつながる地域の経済を活性化していこうということで、「百年の森林構想」というのを2008年に立ち上げた。
- ・ 森林に経営資源と人的資源を集中的に一点集中型で進めていくことで、突破口にならないかと、もう50年みんなで頑張っ、百年の森を育てながら、優良な経済と森を育てるという中で、経済を小さくてもいいので起こしていこうという、取り組みを始めた。
- ・ 「百年の森林づくり事業」というのは、2つの仕組みになっている。
- ・ 山側とそれから消費者側に向く仕組みが2つあり、山側は施業管理委託契約という契約をやっており、これは村役場が主体となって、森林の所有者の方に向け、10年間村に山を預けてみませんか。施業の費用はかかりませんよ。村が計画を立ててきちんと整備して、10年たったらお返ししますと。
- ・ 間伐をすると当然木が出るので、この木を次の仕組みの中で売って、その利益の2分の1を所有者さんにお返しをさせていただく。2分の1は村がいただいて、次の施業に充てさせていただくという仕組み。
- ・ お預かりさせていただいた山については、森林組合と地域の林業事業体さんを中心に、間伐であるとか、作業道を入れていくという流れ。
- ・ 一方、森の学校に加わっていただく部分が、川下側から都市部に向けたところで、森林管理の基本合意書というのを結び、こちらのほうで間伐をし、この木は、全量、この株式会社西粟倉・森の学校に買っていただくことになっている。
- ・ 森の学校が製品をつくり、内装材にして、エンドユーザーである都市部の方に届ける。もしくは法人のお客様に届ける。その得られた収益が役場を通じながら、また所有者さんに返っていくという仕組み。

- ・ 株式会社トビムシというベンチャー企業、こちらは東京に事務所があり、東京の方々に森林事業の取り組みを紹介したり、クラウドファンディングをやったりして、高性能林業機械を買い、それを林業事業体に安く貸して、経費を合理化した上で、所有者さんに少しでもお返しできるものを増やす。
- ・ 平成26年からは村楽エナジー株式会社というベンチャーの会社で、優良材でないものを、まきボイラーとして、化石燃料から木材バイオマスへ転換するという作業を行っている。木全体を回していく取り組みしている。
- ・ 森の学校は、平成10年に廃校になったところに事務所を構えて、今はエーゼロという会社の、インキュベーション施設になっている。
- ・ 百年の森林に絡むような挑戦をする人たちが最初は多かったが、そこを起点に何か別のことでいいということで、挑戦する人も3年ぐらいを経過すると増え始めた。
- ・ 次々にいろいろな方たちが入ってこられて、オーガニックコットンの染め物だとか、ジビエの料理だとか、おもちゃだとか、食用油だとか、いろいろなものができ始めるというようなことが起きてきた。
- ・ 村としたら、いろいろな国の制度もあるので、こういうチャンスに、できたら多様な起業家の誕生をより加速させる取り組みに挑戦したいと、その取り組みを始めたのが2013年から。
- ・ もともと森の学校は定款が2種類あり、木材の付加価値をつけて都市部に売って行って自然資本を上げていくという定款と、移住・定住だとか起業を支援するという社会資本系のレベルを上げていくという定款があった。
- ・ 先ほどのような木材の取り組みが定着化してきて、今は需要に対して供給が追いつかないという状態になるので、分社化をして、そこに専念する会社と、移住・定住に専念する会社の2つに分けた。
- ・ このエーゼロが、メディア事業だとか、建築不動産事業だとか、ローカルベンチャー事業だとか、こういった事業をやるようにした。
- ・ 目的はここにあるように、村と一緒に地域の経済土壌を豊かにする事業を一緒にやっっていこうというのが、大きな目的。
- ・ 本当に本式で始めたのが2015年、3年前。定住しなくてもいいということで、このローカルベンチャースクールを始めた。
- ・ ただ、定住しなくていいと言いつつ、地域おこし協力隊制度も活用しているので、本

音の部分では定住していただきたかったが、ここでポイントとしたのは3つぐらいのテーマを設け、まず本当に自分がやりたいことをやるという本当の起業家の人と、それから地域の会社の2次創業だとか事業拡大。いわゆる右腕の人材になる方。それから事業継承者がいないということで、廃業になるような事業所のところで、何かやることないかというような3つのテーマで投げかけ、スクールをやっている。

- ・ 東京で1回開催して、地元で3回。来年以降、西栗倉で地域おこし協力隊制度などを活用しながら、3年間頑張ってもらって人を育てるという一連の流れ。
- ・ これには、やっぱり地域内だけの職員では人を育てるというのはできないので、地域外の主に都市部で起業された方だとか、クラウドファンディングをやっておられる方だとか、そういった方にメンターとして参加をしていただいて、事業計画をブラッシュアップしていく。
- ・ 2015年のときは22人書類を出されたが、レベルがかなり幅があるということと、もう一つは計画を出すということがそもそもハードルが高いという課題が2点あり、これを解決するのにどうするか。
- ・ 東京に受け皿を作って地域で活躍したいという人を集めて、いろいろな勉強をしていただいて、それに地域は別の受け入れ側の仕組みをつくって、そこで育った方たちが地域を選んで、その地域で今度頑張るみたいな前段階をつくらうということで、10の自治体でNPOのETICと連携をし、ローカルベンチャー推進協議会というのをつくり、人材育成の仕組みをつくっている。
- ・ 将来的にはここでプログラム開発したものをいろいろな自治体が使ってもらえる仕組みにしたい。
- ・ こういった形でやった中で課題になったのが、何か地域で自分がやりたいこととか、できることを探したいという人たちもいるということで、LOCAL Life LABOというものを今年からつくり、1年間地域に来て、自分で研究のテーマを決める。
- ・ 計画を出す前の1年。それを支援するという仕組み。
- ・ 決まっていないものをもうちょっと磨く。それができたら、2年、3年目ぐらいからローカルベンチャースクールに移行し、本格的に計画をブラッシュアップしていくという受け皿をつくっている。今年は多分6人ぐらいがこのLLLに入る。
- ・ もう一つは、今度は入った方が起業を始めた方とか、第2創業をやりたい方とか、地

域でそういうことをやりたい方は、意外と境目ができて、1ターンで入った方と地域の方っていうのが、まじり合う機会が作りにくい。

- ・ ローカルモーカル研究会というのを今年から始めて、いろいろな事業をやりたい方とか、日ごろから考えている方に対して、いろいろなメンターの方をご案内して、みんなで話し合おうというもの。今年は10回を予定、今まで8回開催。
- ・ こういった流れで、関係人口を、西栗倉では、核になるキーとなるような方たちがいて、それに対して、ローカルベンチャーが移住・定住をしてくる。
- ・ その方たちの膨らみができてくると、キーマンや村の取り組みに賛同して、応援してくれる都市部の方たちができて、そういった形で関係人口をつくりながら、社会資本の増になって、地域が経済が豊かになるというような連鎖を、偶然なのか、キーマンの方たちを中心にしてきたのか。そういったことになりつつある。
- ・ まず、百年の森林事業で言えば、地域の自然資本の価値をかなり10年ほどかけて上げ、2018年、17年ぐらいから、今度は社会資本を上げていこうという方向で進んでおり、それが経済を豊かにすることにつながり、上質な田舎というのを標榜し、2058年にそういったところにつながっていけばいいというふうに考えている。
- ・ 挑戦したいという話したが、そういうのが村の中なので、10分圏以内のつながりぐらゐのような形でできていったらいいなということで、今進めている。
- ・ いろいろな移住の方たちが来ているので、そういった方たちのネットワークであるとか、地域の人以外には非常に重要で、地域の方とまじり合う形で進められたら。

(小田切委員長)

- ・ 地方創生特任参事ということで、上山さんは何者であるのか。まずその点から。

(西栗倉村 上山参事)

- ・ 地方創生特任参事をこの5月1日から。実は地方創生を推進する課はない。
- ・ 各部署から、そういう議論ができる人間を集め、地方創生推進班というのをつくっている。
- ・ 「百年の森林」という旗を立てて、これが10年たっており、次の旗をどう立てるかという議論と、総合振興計画が、より具体的に本当に住民の方はどういう施策を望まれているのかというのを、個別、逆に言うとスタッフがどういうふうな仕事がしたいかの観点から事業を組み上げるという班の担当をしている。
- ・ もう一つは、産業観光課長を務めており、百年の森林事業が始まったときから9年目

になるが、人事異動はなしで、ずっとこの事業をしている。百年の森林構想に始まり、今は環境モデル都市であるとか、バイオマス産業都市であるとか、低炭素な地域づくりのほうと、ローカルベンチャーの事業を、それぞれうちの課が担当し、9年間ずっとその担当をしている。

(小田切委員長)

- ・ 2013年からの、いわば第2段ロケットの部分は非常に仕組みられていると思うが、2009年からこの2013年までの、言ってみれば第1期。ここでいろいろな動きがあるのがポイントだと思うが、動きが活発化した要因は何だというふうにお考えになるか。

(西栗倉村 上山参事)

- ・ 2009年からは、前村長が、非常に山に興味があつて、これから先は山の資産をいかに管理していくか、これが一番重要だということで、非常に大きな人の比重もかけ、林野庁からも派遣をいただいて、進めている。
- ・ 人と話をしていくことがベースになるので、マンパワーをかなり厚くしながら挑戦してきたということと、それから森林に一点集中できたので、それがよかった。

(小田切委員長)

- ・ 地元の方々とベンチャーで入られた方々との関係性。その融合のためにいろいろなことをおやりになっている。

(西栗倉村 上山参事)

- ・ 最初は、地域の方から見ると、何か得体の知れない若い人たちが入ってきて、思い入れのある小学校の中で得体の知れないことをやっていて、しかも木を扱うので、これからお金になるところのおいしいところだけ持っていくみたいな話がかかり出た。ただ皆さんそれぞれ事業として成功していくと、だんだん周りは認め始める。
- ・ だから、そういう流れをつくるというのと、行政サイドはやっぱり地域の方とどうしても摩擦が起きるので、そこ間の潤滑油になるという作業が中心だったと思う。

(小田切委員長)

- ・ 最近では、各地でIターンがUターンを呼び込むという、こういう関係が明らかになりつつあるが、西栗倉村でも同様にUターンが増えているか。

(西栗倉村 上山参事)

- ・ はい。Iターンで起業された方のところで仕事をするケースがだんだん増えている。

- ・ それは技術がある方で、例えばスイーツ工房をするときに、外でそういうケーキをつくっていた方が地域に戻ってくるとか、戻ってきてITをするとかいうような方たちも増えてきているのは間違いない。

(小田切委員長)

- ・ 「上質な田舎」という、これ自体まさに上質なターゲットだと思うが、上質な田舎のイメージ、これはどういうものだというふうに考えればいいか。

(西栗倉村 上山参事)

- ・ 私どもが想像している上質な田舎というのは複層林。地域自体がそういういろいろな大から小までが、乱雑と言えば乱雑だが、そうやっていわゆる土壌が豊かな地域というのが、上質な田舎のイメージ。
- ・ 経済もそういうイメージという形で捉えている。人の関係も。

(小田切委員長)

- ・ 表紙にある多様な生態系という言葉は、おそらく文字どおりの生態系ということと同時に比喩的な社会関係における生態系ってそういう意味も。

(西栗倉村 上山参事)

- ・ そういうふうに捉えている。

(若菜委員)

- ・ 基本的には民有林が多かったからできたのか。

(西栗倉村 上山参事)

- ・ 5,500ヘクタールの山があり、村有林がそのうち1,400ヘクタールほど。それを管理するノウハウはほかの自治体と違い、行政は持っていた。
- ・ 残り4,000ヘクタールについては、1,000ヘクタールほどが住友林業のような大きな会社で、残りの3,000ヘクタールが1,400人ぐらいの方がお持ちの山なので、その3,000ヘクタールを村がお預かりするという形になる。

(若菜委員)

- ・ 10年最初契約をされて、もう10年たったところもあると思うが、これからもまだ預けたいというのか、1回お返しして、山主さんに管理を頼んでいくのか。
- ・ 複層林というのが上質な田舎のイメージだということだが、林業の施業としては抜き切りをしていくのか。例えば広葉樹の用材とかもつくっていくのか。

(西栗倉村 上山参事)

- ・ 最初の更新が、31年3月。ただ、今は、管理協定だけで動いており、山主さんの選択肢は今それしかない。
- ・ 今、森林の民事信託であるとか、選択肢を広げるという作業をやっている。行政ではなかなかできないので、民間ベンチャーで立ち上げさせて、資金もそこで集めるみたいな流れを今想定しており、東京都内の信託銀行だとか、法律家の方とか集まって、そういうスキームを今つくっている。
- ・ 森林は、当然、そのような事業をするためには、森林のデータはきちっと統計的に持つ必要があるので、今レーザー航測と言いつつ、村の木が1本ずつわかる。高さも太さも。資産の計算もできるので、成長量もわかる。それと地形も3Dでわかるので、ここ道入らないよねというのもわかる。
- ・ 生産林のところは、60年生、70年生に固まっているので、これをもう十何年間伐続けると、切る山なくなるので、年間数ヘクタールは計画的に主伐をし、植えていくという作業をやらないといけないので、平成35年にはここを主伐して翌年植えるという計画を20年ぐらいいは立てる作業をやっていて、年内には終わると思う。

(若菜委員)

- ・ 基本、杉・ヒノキをもう1回更新していくのか。

(西栗倉村 上山参事)

- ・ 生産林とすると、そういうところになるし、それから環境林とすると複層林。広葉樹を植えていくということになる。どう組み合わせるかというのが課題。

(若菜委員)

- ・ それを考えるのは誰か。

(西栗倉村 上山参事)

- ・ うちのスタッフと、専門家の方々のノウハウと知識がないといけないので、そういう方に集まっていただいて、そういう計画を立てる作業をやっている。

(若菜委員)

- ・ そこには、このトビムシさんとか、森の学校はかかわらないのか。

(西栗倉村 上山参事)

- ・ 森の学校については、ちゃんと付加価値をつけて売っていただくというところに傾注をするということで、山側についてはまた別の考え方をしている。

(小田切委員長)

- ・ 論点は2つ。ひとつは、地方への移住・定住の促進に向けての戦略的な支援として、この事例から何が引き出し得るのか。
- ・ それから、もう一つは、地域側のコネクションハブ。インプリケーション大きいところだと思う。今ご発表のこと、何に注目したらいいのか。

(藤山委員)

- ・ 何が戦略支援とかいうことでは、生態系という言葉に尽きる。まとまりある循環系。
- ・ しかも、我々ずっとフローを重視してきたんですが、地方はストックだと思う。しかも開かれた循環系。閉じていない。
- ・ これも森は森で循環しているが、そのチームも。そこに異なる循環です。開かれた循環系をされている戦略が本当は、非常に印象深いし、いいんじゃないかなと。
- ・ その上で質問。百年の森のすごい生態系をつくりあげた。率直なところ、どこまで見通されていたのか。
- ・ ただ、生態系だから、途中から連鎖反应的にどんどんつながっていったと。何かそれが自然につながっていったところの契機というか、おわかりのところがあったらぜひお聞かせいただきたい。
- ・ 2番目は周りの市町村どうなっているのか。循環が広がっているのか、まだなのか。

(西栗倉村 上山参事)

- ・ 事業スキームについては、村楽エナジーを除くと、ほぼ最初からの事業モデル。
- ・ いかに当時の現場に携わっていない人たちが、きれいな絵を描いたものをやりきってきたかと思っている。
- ・ ただ、スキーム以外のものについては、今行っているものに対して新しい状況が出てきたときには、それをつけるみたいな。創発的な部分がありながらやってきたと思う。
- ・ なので、住民の方に説明をしながらやるというのは非常に難しく、スキームになって成文化したものを住民の方にご説明するという形のほうが主だったと思う。
- ・ 近隣の市町村の方には、具体的に、ということにはないが、この取り組み結構、横、水平展開しているところがあって、形は違うが、徳島那賀町だとか、佐川町だとか、自者に合わせられて横展開されているところはある。
- ・ ただ、やる気があるとかないかが最後のカギになる。

(小田切委員長)

- ・ この図で言うと、エーゼロと役場との連携というのは、実はここに書ききれしていない

いろいろな生態系がある。

- ・ そういう意味では、これは百年の森を中心としたものであって、別の局面から見ると、また違う図が描ける。

(西栗倉村 上山参事)

- ・ はい。これはあくまで山の自然資本の部分だけ載せているので、社会資本の部分についての図は、ここには載っていないというふうにご理解いただいたらと思う。

(玉沖委員)

- ・ 起業者支援のところでも2つ、お尋ねしたい。
- ・ まず1点目は、ファイナンシャルの部分で、何か固有の、創業資金の支援みたいところで、何か仕組み化されているものがあるか。
- ・ 2つ目が、起業されて、最低限、自分の生活費が収益がないと、定住も定着もできないと思うが、その秘訣だったり、ポイントだったり、教えていただきたい。

(西栗倉村 上山参事)

- ・ 起業の支援というのは、金銭面の支援というのは、ほとんどない。地域おこし協力隊の制度が使えれば、それを有効に使えるような形でのご案内はさせていただく。
- ・ 既に起業をやられた方たちが、売り上げ5千万を超えるか超えないかがその起業の継続性につながるということ。
- ・ それから、とがった方が地域に来て、1人でできるのは、二、三千万でできる。そうすると地域の雇用につながらないので、より押し上げて、地域の雇用へ持っていくとすると、5千万ぐらいが1つのめどになるので、そういう計画を出していただく方には、マーケティングだとか商品開発だとか、そういう支援を、お金でさせていただくという制度は、昨年度からやっている。
- ・ それは行政だとか、村長だとか、議会の議長が審査するわけではなくて、地銀だとか、政策金融公庫だとか、専門家の方だけが判断するという仕組みと、あとはローカルベンチャースクールで校長しています勝屋さんは、やる気を判断するみたいな形で、その方たちに審査していただくというやり方をとっている。

(小田切委員長)

- ・ ローカルベンチャーファミリーは139名。世帯数で言うと60とか70。
- ・ そのうち、地域おこし協力隊の仕組みを使った世帯は、60、70を分母にすると、どのぐらいになるか。

(西粟倉村 上山参事)

- ・ 現在、18名。過去からの累計で、私の感覚で言うと54、5だと思ふ。

(小田切委員長)

- ・ そうすると、ローカルベンチャーで入られている方々は、比較的多くが地域おこし協力隊の仕組みを使っている。

(西粟倉村 上山参事)

- ・ 基本的にはその仕組みを使っている。

(小田切委員長)

- ・ 先ほど、ご報告で85%って言ったのは、おそらくこれは定着率。
- ・ 入り口のところでも、7割、8割の方が利用されている。

(西粟倉村 上山参事)

- ・ はい。

(沼尾委員)

- ・ 最初の全体概要図で、森林所有者に対して、2分の1ずつでということで、村のほう
が施業を請け負う契約をされて、森林所有者に対する所得は担保しつつ、その後川下
のところだけを移住者の方たちでやるという形で、もともとの住民の所有者の方と、
移住の方と、それぞれ別のスキームで取り組めるような形で、ある種の分業というか、
収益を分配する仕組みをつくっているというのが、ものすごい戦略だと思って、大
変興味深く伺った。
- ・ 林業の場合はこういうことができるだろうと思ったが、これが農業だと、移住者の方
と、もともとの住民の方とが競合する可能性があり、これは林業ならではのモデルだ
なというふうに思いながら伺った。
- ・ 例えば実際移住された方たちが、自分たちもこれから山を持ちたいとか、あるいは、
今山持っている方がもうこれ持てないからとかっていうようなことで、今後そこがま
じってくる可能性もあるような気がするが、そういうところがこれから交わってきた
ときのプラットフォームづくりみたいなことは、戦略として考えているのか。

(西粟倉村 上山参事)

- ・ 大きな流れとしては、私が考えるのには山と状況は変わらないというふうに。
- ・ 基本的に、人口減少に伴いまして、相続が発生しております。私らの年代の人たちは
みんな東京とか大阪にいらっちゃって、相続で、地域に資本はあるけれども、使う権

利は地元に残らずに、大阪だとか東京に流出するというのが、今の流れ。

- ・ そうなると、要は農地も誰が管理するのという話にやっぱりなってくるので、多分、次は、これいいとは僕も一概には言えないが、同じような仕組みを、どこかで農地も打ち立てないと、誰も手が出せないということになるので、そういうスキームというのは考え始めている。
- ・ 山は今でも年間数十ヘクタール売りたいという方たちが出ている。なので、要はどこに売られるのかっていう話。他所に売るとなれば、その地域で使えるような売り方、もしくは預け方にするというところが今後ないと、全部流出してしまうということになってきているので、今後の戦略として、どうしても位置づけないといけない。

(沼尾委員)

- ・ 実際森林所有者の方たちは、移住者の方が入ってきて、川下でお金を生んで、それが収入になっているということで、売らずに持っておこうとかがっていうことは、あまり考えていないのか。

(西粟倉村 上山参事)

- ・ 60代、70代の方はまだ土地に対する神話のようなものをお持ちだが、40代、50代になるとない。
- ・ Iターンの方たちに農業をやっていただくというのは非常に重要なことなので、流動性を高めるというやり方はやっている。

(沼尾委員)

- ・ 川下でやっている方がこれから森林を所有するという形で売っていく、あるいは、今のオーナーがこれから外に出ていくかもしれないということも含めて、その所有をどうするかということ、移住者の方も入れて話をするとか、何か契約のつなぎをするとか、そういうことってというのは考えているのか。

(西粟倉村 上山参事)

- ・ 今は、移住者の方とそなたたちの売買の支援をするという話は具体的にはない。
- ・ ただ、ちょっと考えているのは、ウェブだとか、紹介サイトだとか、村があくまで主導をとった上で、そういう仕組みづくりもあってもいいとは思っている。

(広井委員)

- ・ 印象として村全体がある種ベンチャー組織のような、進取の創発性に富んだものになっているということで、いろいろな意味ですばらしいと思った。

- ・ 本当に学ぶべき点が多い事例だと思うが、ちょっと漠然とした質問かもしれないが、特に大きな要因は何であったと思われるか。
- ・ やはり2008年のときの前の村長さんのときの百年の森林構想。これの先駆性というのも大きかったと思うし、そこに牧さんという方や何人かのキーパーソンの方が、それがまた連鎖的に波及し、行政のいろいろな対応とか、1つの要因には決して換言できないとは思いますが、特にここが要因としてここまで発展した要因として大きかった点は、どのような点か、改めて伺えれば。

(西栗倉村 上山参事)

- ・ 最初のスタートは、村長の強い思いもあって、キーマンになる方が入ってこられて、村はその方たちと取り組みながら、その方たちの邪魔をしないっていうことができた。
- ・ 百年の森林事業の第1段階をやる中で、外部の人とつながったことが成功事例だと認識。
- ・ それ以降の取り組みも、その方たちとやることが、成功への早道だっという認識ができたことが一番大きいのではないかなと、行政職員としては思っている。
- ・ いろいろな事業を展開するときに、ネットワークの中でどんな人がいるか。どんな人が来てもらえるかとかいうのをまず考えてやるので、そこが一番大きい。

(松永委員)

- ・ やはり産業というのは、人を、仕事をつくるという意味で、地域を支える。単に移住と定住、暮らしというところで議論が先行しがちなところを、やっぱり産業というのが基本にあるということをお今日改めて教えていただいた。
- ・ 一点突破という言葉も印象的。西栗倉村のような人口1,500人ぐらいの規模だから、1つの産業を森林産業ということで根幹をつくって、第2段階で来る移住者に、多様化を求めていったということができたのかなという気もする。
- ・ 一方で、社会人口を増やしている幾つかの全国の市町村に、それは非常に共通するところじゃないのかなと思った。
- ・ そう考えたときに、根幹がありながらオープンに多様な人材を引きつけているという点で、事務局からご説明あったマトリクスが本当に詳細にできていて、全て現在の事象を押さえているなどと思って、改めて勉強になった。
- ・ 最初の第1段階というのは、言ってみれば森林産業に特化した人を呼び込んでいるというのは、クローズな面もある。

- ・ クローズなところで、根幹で産業化をなした上で、第2段階としてオープン化と多様な人材。あるいは定住しないというふうないろいろな関係人口の多様化をつくっているというのは、今日聞かせていただいた1つのポイントかなと思った。
- ・ 西粟倉村と現在地方創生で比較的成果を上げているような市町村と、何か共通するような項みたいなものがありましたら、教えていただけたらと思う。

(西粟倉村 上山参事)

- ・ 今10の自治体の方と、お話しをしながら感じているのは、エーゼロと同じような取り組みをする組織が、その市町にはある。
- ・ 行政とそこが連携しながら、共通の土台でやっていくという仕組みが成り立っている市町がその10の市町で、そこが一番共通しているのかなと。

(高橋委員)

- ・ 一般的になかなかクラウドファンディングの仕組みを使ったとしても、200万円とか300万円ぐらいがどうしても今のところ、限界であると。
- ・ 本来であれば、地域金融の果たす役割が、地域の中で循環させていくイニシャルの部分を、融資で応援するような仕組みが当然必要だったはず。
- ・ また、イニシャルではなくて途中途中の必要な運転資金も実はかなり本当は発生してくるはず。そこは、必ずしも行政側の支援や補助金のようなものに頼るのではなく、自走化しながら持続をしていくには、地域のお金をうまく回していく仕組みが必要で、そのコネクションハブの中に地域金融機関が入っていなければいけないんじゃないかなと思った。
- ・ この百年の森事業そのものが、この地域にあるものを生かしていくという発想に徹底しているところがすばらしい。
- ・ 幾つかのところに出てくる事例だと、その地域にないものを無理やり持ってきて、無理やりに人口が増えているような例がある気がする。
- ・ そうではなくてあるものを外に売っていくということを重点にやらないと、ないものを持ってこようとしている間にあるものがなくなっているというのが、今現実のような気がする。

(西粟倉村 上山参事)

- ・ 直接ベンチャーには関係ないが、水資源とかあるので、電源開発をやる。そうすると、今、水力発電を持っていて、7千万ぐらい収入がある。1億3千万ぐらいの税しかな

いので、0.5分ぐらい。これにもう一つ電源開発をやると、また5千万ぐらいなる。そうすると税と同じ収入が得られる。

- ・ 今研究しているのは、ICO。仮想通貨の可能性について検討しており、今、事業スキームについても検討中。

(高橋委員)

- ・ イニシャルでは地域の金融が難しかったかもしれないが、これだけ事業化して、数字になってくる段階での地域の金融はいかがか。

(西粟倉村 上山参事)

- ・ そういう意味では、山を越えた隣の県の銀行、地元の銀行だとかは、支援はして下さるようになった。

(若菜委員)

- ・ この全体概念図、概要図を見ても、そもそも移住・定住を増やそうと最初は思っていなかったんじゃないかなど。
- ・ 地域の自然資源である森林をとにかく金にしようというか、産業にしていこうというところで描いていて、途中から、人も増えてきちゃったみたいなの。
- ・ 移住・定住について、最初から思っていたのか、途中から思ったのか。
- ・ 小さな村ではなかなか外を勉強する機会がなく、どうしても広いこれぐらいのことは考えられないし、なかなかやってみようという意識も高まらないところが、難しいところだが、職員さんはこの取り組みの中で変わったかどうか。

(西粟倉村 上山参事)

- ・ 人口の問題というのは、人口を増やすというつもりはなかった。結果として、森林の整備のために人がいるので、それに傾注をしたというのが事実。
- ・ そうしている間に、全然関係ない人たちも応募してくるので、その受け入れを始めた。それが意外といろいろな分野に広がり、積極的にやったほうがいいという形で、人口維持につながるという認識に変わったと思う。
- ・ 確かに最初は木材に付加価値をつけ得る人材だとか、森林整備をする人材だとか、そういったのを中心に検討はしていたので、流れの中で変えてきたというはある。
- ・ 職員は、こういう事業をやっていると、いろいろな職員と交流がある。
- ・ 絶えず交流しているので、市町村連携に近い状態になっている。職員同士の情報のやりとりというのはもう始まっているので、そういう意味では、職員のレベルは上がっ

てきている。

(小田切委員長)

- ・ それでは、事務局が用意していただいた論点のほうに移っていきたい。
- ・ 2つの論点ということで、前回の委員会で、私、かかわりの階段というふうに、単純化させていただいたが、クラスターといいたまいますか。それをつくっていただいたということだと思う。これが、1、2、3、4、それぞれ乗り越える壁ということが、こういうことでいいのかなどか。
- ・ それから、コネクションハブの問題が出ている。例えば、トビムシがむしろ都市サイドで活躍していたということを見ると、実は、都市サイドのコネクションハブも必ずしも十分ではないという、そんな認識が西栗倉村ではあったのかもしれない。そしてエーゼロが、地域側のコネクションハブの役割を果たしていることは間違いない。

(藤山委員)

- ・ 今の西栗倉の感じでも1つ思うのが、やっぱり人と地域の関係性が一番強い形はオーナーシップだと思う。その土地所有とか。逆に言うと、西栗倉が合併していたら、これできたのかなど。多分、できなかった。
- ・ そうした広い意味でのオーナーシップにどういうふうに位置づけていくか、その辺が問われるんじゃないかなというのを1つ関係性のところでは、概念としているんじゃないか。
- ・ 2番目が、まさにこのハブの問題。先ほどの西栗倉のものを見ると、こういった1、2、3、4の間に自由に行き来できればいいかという、そうじゃないんだなというのが、非常に今日気づかされたところ。
- ・ むしろ、西栗倉村のいろいろなチャンネルがある。行政のチャンネルあるし、民間のチャンネルもある。いわば毛細管現象みたいなので、一つ一つが根づいているからこそ、しかも、ある程度時間かけて、二、三年。だから、ちゃんと付加価値がついて、いろいろな共生関係もやりながら、次の段階に。
- ・ しっかり時間かけながら進んでいく。ステージとして、そういう地域側のハブというのがある。しかもいろいろなチャンネルが毛細血管のようにあると。
- ・ じわーっと浸透圧をかけるように入ってくるというあたりが、本当は非常に重要で、だからこそ生態系が成り立つというか、できていくんじゃないかなと。

(小田切委員長)

- ・ 西栗倉村のお話を聞いて、最初から起業の関心で引っ張っている。
- ・ したがって、この図で言えば、通常であれば第3象限から第2象限に移動し、対象がずれていくということを想定しているが、ところが常に産業ということ意識している。それは、稼げる産業ということではなく、創意工夫ができる産業という。何か産業の意味合いが違うものに注目されているような気がしている。

(西栗倉村 上山参事)

- ・ 行政側は、その会社が成り立っていけばいいかなと思っている。儲かっていくとか、そういうイメージは持っていない。
- ・ ただ、2016年企業のテーマは、しっかり儲けようで上げているが、ただ行政側からすれば、その起業があることに価値があるみたいな感覚をとっている。

(小田切委員長)

- ・ 第3象限のときにある産業と、第2象限にある産業の意味合いが違うようなそんな理解ができるのかなというふうに思った。

(玉沖委員)

- ・ 議論のポイントの1のところに沿って、現状認識の2点について、ますますこのとおりだなという確信を強めた。
- ・ ここで、このマトリクスを拝見して、改めて入り口と選択肢が豊富である。どの入り口から入ってもいいですよ。まさに、西栗倉村さんの定住しなくていいですみたいなメッセージなんてとても素敵で、とてもコンタクトをとりやすい、反応しやすい。
- ・ そんなふうに入り口が自由で選択肢が豊富というのは、非常にすばらしいが、逆に受けとめる側の体制が必要で、ここが非常に難しく求められるところだというのが1つ。
- ・ もう一つは、大きな方針が、地域側に打ち立てられていて、反応がしやすいのか。
- ・ 例えば、森林作業士の方、100名採用しますとかっていうと、そこに選択肢が1つなので、逆に反応しやすい。受け入れる側の体制も、大きな方針が打ち立てられていてシンプルでいいのかなという相反する2つのことを感じた。
- ・ 今後の方向性の1点目の後半に、戦略的な視点を持って取り組んでいる自治体は、まだ少数にとどまっているというところ。ここが悪循環に陥っている自治体や地域をどうするのかというところを、少し今後フォーカスすべきじゃないか。
- ・ いろいろな原因があると思うが、この何か1歩前に進まないとか、悪循環に陥ってしまっているという地域をどんなふうにしていくのかというフローチャートやプロセス

について、少し視点に含める必要があるのかなというのを感じた。

(松永委員)

- ・ マトリクスについて、フラットに書いていると、どれも重要だし、今回住み続けられるという意味で、どんな人でも多様にオープンに人口回帰を進めるという点では、全ての主体は重要だと思う。
- ・ もう一つの視点として、稼げる国土。あそこ切り離された議論のようにたまに感じるときあるが、接点を持って、住み続けられる、かつ稼げるという視点も重要。
- ・ その上では、7ページの特に黄色いマーカーで彩られているところは、特に重要だと思うが、第2象限の黄色。上山さんのお話では、起業といっても2種類あって、5千万円以上年間売り上げがあれば、地域雇用に貢献される起業だと。それは所得と雇用両方生んでいる起業ということで、産業の根幹になり得ると思う。
- ・ もう一つ、ここで言う起業・継業に当たるほうだと思うが、これが年間二、三千万の売り上げ。この仕事をつくり出すという主体。この2つというのも、明確に分けつつも、やっぱり力を入れていくゾーンなのじゃないかなと思う。
- ・ そういう意味では、幾つかの選択肢を青写真として示しつつも、やはりメニューをつくる際の、産業とか所得、雇用というものを生み出せる人材に傾注していくところのハードルを超えていく支援が必要なんじゃないかなと感じた。

(広井委員)

- ・ やはり、中央政府レベルの支援策というのが、かなり重要な意味を持っている。
- ・ 創発性はローカルから出てくるが、それを支援するような枠組み、政策が重要になる。
- ・ 都市と農村というのは、ある種非対称的な関係性があると思っていて、どうしても農産物とか自然にかかわる商品というのは、市場経済ではわりと低く評価されるので、なかなか収入につながりにくい。そこで、国レベルないし中央政府での都市と農村を超えての再分配みたいなものが重要。
- ・ 地域おこし協力隊にしても、先ほどの地方創生関連も、この7ページのこういうマトリクスで、ここでの境界を横断して超えていく、あるいは滑らかにするためのそういった中央政府、国レベルの政策との対応関係はどうなっているか。
- ・ その辺を少し明らかにできれば、敷居を低くするという意味でも、国レベルの支援策とこのマトリクスとの関係みたいなのを明らかにすることが課題かなというふうに思います。

(沼尾委員)

- ・ 地域側のコネクションハブというのをどう位置づけるかということを非常に難しい。
- ・ 今日の西栗倉の話で言うと、地域をどうしていくかっていう戦略があって、それがある種のそれぞれの場面場面に応じて、必要なハブ機能というのを生み出してきていると思う。
- ・ 実際に都会の側から人が例えばどこに移住しようかって思ったときに、それぞれの地域がそういう形で戦略的なハブを持っているのであれば、すごく選択肢として広がるし、自分のマッチングも考えられると思うが、逆に今日の7ページにあるような資料が全国的に出たときに、多くの自治体は、結局場をつくるっていうことを先にしてしまっ、地域の戦略としてハブで何をするのか、地域の特性とか資源というところから、なかなか軸足として考えられないんじゃないかととても心配している。
- ・ ハブをつくるというときに、その地域の自然資源、戦略というもの、特性というものを踏まえて、そこをどうしていくのかを考えると同時に、どういう形でネットワークハブをつくるのかセットでないと、場をつくるのが目的化してしまわないか。

(高橋委員)

- ・ 外に売っていく以外に稼ぎようはないわけで、中だけで回るお金では限界がある。
- ・ 外に売るとなると、実は中小企業も同じことがいつも起きるが、自分たちがいいと思ったものは、マーケットが欲しいものと大分違う可能性がある。
- ・ 都会の人が地域に入っていくって、むしろユーザーだった人たちが入っていくって、自分たちが欲しいものをこの中で林業にしても、こういうものだったら使えるんだという意見が入っていくような役割が、人の交流のもう一つの重要な実は役割を果たしている。

(野村国土政策局長)

- ・ 住み続けられる国土は、稼げる国土とダブっている。私はやっぱり金回りを生んで、ご飯が食べられる状態をつくっていくということだとすると、多分テーマはかなり共通しているが、西栗倉村の場合、それを特定の企業とかのノウハウに頼ることじゃなくて、むしろ地域共有の森林という資源に着目されて、そこに付加価値をつけていく。
- ・ 販路のというか、地域の中で回るお金のレベルを超えているので、やっぱりステディーに物が売れていくというときに、専門家といいたましようか。少しアレンジしていただければ必要ないと、需要化とのつながりって多分出てこないの、その需要者に

向けたコネクションハブみたいなものも必要になるのかなというのが1つ。

- ・ ただ一方で、現地消費型の食堂とか、それからスイーツなんかもあって、それは多分商圈がある程度限られている。これがどれぐらいまで、西粟倉村の場合広がっているのかって実はちょっと途中で聞きたかった。
- ・ 非常に国土交通省的な言い方で恐縮ですけども、先ほど鳥取自動車道の話があったのと、智頭急行というので、立地にしては、奇跡的にというか道路というインフラがそこで通っていて、それが、今の西粟倉村の成功に基本的に寄与しているのか。

(西粟倉村 上山参事)

- ・ 実は、あのスイーツ工房は、そこで消費しているわけではなくて、全国の百貨店の中元・お歳暮。それから全国の百貨店の小売に使っているので、鳥取自動車道を走って。
- ・ 実は百貨店もコネクションで運送業者さんがあって、その中に積み込んでいく仕組みができていますので、全国にという形になっており、当然木材も含めて、鳥取道があるので、かなりの量が動いていくということがある。
- ・ Iターンの方も、遠いようで近いので、友達も来やすいということで、西粟倉を選びやすいという利点もあります。

(小田切委員長)

- ・ 2つの論点については、これが論点だということがこの委員会で認められた。
- ・ もちろんいろいろな意見が出ましたので、修正は必要だと思いますが、第1の論点については、マトリクスを充実するような形で議論を進めていく。
- ・ 第2の論点については、コネクションハブ。これは地域サイドだけが強調されておりましたが、都市サイドもやはり重要だというそういう補足があった。この両者のコネクションハブについて、深めていくことも必要。
- ・ 2つの論点は的確であり、かつより深める必要があるという方向性が出たと認識。

— 了 —